

(今回のお題)

クラシックピアニストに学ぶ、異分野交流



自分と異質な相手は、
自己のアイデンティティを明確に
してくれる貴重な存在です。

松本あすかさん

ピアニスト

3歳よりピアノを習い、6歳でピティナA1級金賞、7歳でプレモーツァルト国際コンクール3位およびプレモーツァルト賞。以降、国内外で演奏活動続ける傍ら数々のコンクールに入賞。16歳カール・ツェルニー国際コンクール(プラハ)3位、23歳ピティナグランミュースA1カテゴリー第1位。2008年『PIANO ESPRESSIVO』でCDデビュー。

◆ 一步外の世界に出て、自分の立ち位置を確かめる

クラシックから飛び出した時期があるんです。18歳からの5年間。ジャズやポップスを学ぶ学校に通ったり、バンドやユニットを組んだり、ライブハウスやストリートで演奏したり……。でもこの経験は大きかった。自分と異質な相手ほど、自己のアイデンティティを明確にしてくれる存在はないから。アンサンブルでも、何かの話題でも、さまざまな価値観、環境に育った仲間の中で自分の発言はどう生かされるのか。立ち位置を意識する中で自分というものがだんだん見えるようになってきて、今度は周りに馴染み、自分すらなくなっていく、そんな感覚を覚えるようになりました。それはピアノにすぐ応用できた。ピアニストの世界でうまく弾くというのではなく、世の中というひと回り外の枠でピアノがどういう位置にあり、世の中のためにどう生かせるのか。そんな考え方に変わっていったんです。

◆ 真実は生み出さなくてもすでにある。気付くOKを出すだけ

そう考えたらとても楽になりました。この通りに弾けとあれほど自分を支配した楽譜ですら、むしろ自由のための部品のように見え始めたんです。自由に描けと言われるよりも丸を使って描けと言われるほうが、自由に描けるのと同じです。楽譜と協力し合っただけでその先にあるものを描いていくような感覚。でも私が何かを必死に生み出すのではないんですよ。だって、すでにあるんです、素晴らしい音楽は。自分がそれに気付くOKを出せていないだけで。クラシックに戻った今もいろいろなジャンルのアーティストとのコラボを続けていますが、それだって、彼らから何かを学ぼうとか、伝えてやろうというのではない。もっと自然体。必要なことは自然に自分に入ってくるし、自分だって誰かに必要とされているなら自然にそこに引き寄せられていくでしょう。そういう意味で、自分の音楽を聴いてくれる誰かにも、それぞれ必要なところを必要なだけ感じてもらえればいいと思っています。